探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：吉名学園校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
竹原市立吉名学園	13	138名

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

本校では，昨年度「９年間を通して育てたい力の系統表」及び３～９年生の総合的な学習の時間の単元計画を作成し，「ＩＣＴ活用力」と「プレゼンテーション力」に重点を置いた授業づくりを進めてきた。ＩＣＴ活用力（主として知識及び技能）に関しては，児童生徒アンケートや教師の見取りからも，一定の成果を上げることができたといえる。しかし，プレゼンテーション力（主として思考力・判断力・表現力等）に関しては，その場で言葉を生み出して話したり，相手の共感を得るように説得したりする力が十分でないことが明らかになった。また，「失敗を恐れずにいろいろなことに進んで挑戦できる」というアンケート質問項目では，否定的な回答をした児童生徒が一定数見られたことからも，全体として，失敗を恐れず新しいことに挑戦したり，困難や挫折にくじけることなく進んで改善を図ったりする力が弱いといえる。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

本校は，平成30年４月に義務教育学校としてスタートし，今年度で４年目を迎えた。昨年度新たに学校教育目標として掲げたのが「『拓く力』の育成」である。「拓く力」とは，自身の未来を切り拓く力であり，社会全体の明るい未来を切り拓く力でもある。まさに今求められている，変化の激しい社会に立ち向かう力ともいえるだろう。この「拓く力」を育成するために，まず必要なのは「主体的」であること。そして「自分の言葉で語る力」であると考えた。「主体的」とは，学習に対して真面目に取り組むことや，学習内容に興味をもつといったこともちろん含まれるが，何より大切なのは，自分自身や学校全体，さらには社会全体に対して何かしらの問題意識をもち，様々な学習を通して身に付けた知識や技能を活用しながら，自らの意志で問題の解決を図ろうとする姿勢のことである。そして「自分の言葉で語る力」とは，その問題点や解決に至るプロセス，自身の主張や考えなどを，自分らしい言葉で，他者を説得するように，他者から共感を得るように説明する力である。そこでこの「『拓く力』の育成」に向けて，「**主体的に学び　自分の言葉で語る　児童生徒の育成**」という研究テーマを掲げ，日々の授業改善に取り組むことにした。

（２）資質・能力の設定について

本校では，育てたい資質・能力を以下の12項目に分類し，発達段階に応じて具体的な目標を定めている。紙面の都合上，ここでは12項目の一覧のみを以下に示すものとする。

①　知識及び技能
ア　知識　　イ　技能（主としてＩＣＴ活用技能）
②　思考力・判断力・表現力等
ウ　課題を発見する力・企画する力
エ　活動を計画・推進する力
オ　情報を収集する力
カ　整理・分析する力
キ　表現する力（プレゼンテーション・文書作成・動画制作）
ク　発想する力・工夫する力
ケ　評価する力
③　学びに向かう力・人間性
コ　挑戦する力・改善する力・やり遂げる力
サ　協働する力
シ　将来を設計する力
※　これらの資質・能力を，第Ⅰ期（１・２年生）・第Ⅱ期（３・４年生）・第Ⅲ期（５・６・７年生）・第Ⅳ期（８・９年生）の４つの段階で細かく分類し，整理している。

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

○生活科のカリキュラム開発

生活科は，総合的な学習の時間の素地を育む上で，非常に大切な学習である。しかしまだ本校ではこの関連性を明確に示すことができておらず，１年生や２年生で身に付けた力が，３年生以上でどのように活かされていくのかが曖昧になってしまっていた。そこで今年度は，総合的な学習の時間の関連を明確にしつつ，生活科の新たなカリキュラム開発を進めた。

○プロジェクト型学習の推進

３年生以上の学年では，プロジェクト型学習を取り入れた。「提言型プロジェクト」「貢献型プロジェクト」「夢実現型プロジェクト」の中から，各学年の発達段階や地域の特色，他教科・他領域との関連を考慮し，新たな単元開発に取り組んだ。授業実践・検証を踏まえて，昨年度までに作成した単元計画に大幅な修正を加えた。

また，学習を進めるに当たっては，授業のポイントを，以下の図１のように５つに整理した。このうち特に，失敗・困難に意図的に出合わせること，再挑戦の場を与えて自分の力で乗り越えさせること，それらの活動を支えるべくコミュニティースクール制度を活用することについては，今年度新たに取り入れた授業改善の視点であり，すべての学年で重点的に取り組んだ。

図１　YOSHINA未来学（生活科・総合的な学習の時間）の授業づくりのポイント

【小中連携の取組】

○授業研究の実施

新たに開発した単元について，前期（小学校）・後期（中学校）の教員が一同に集まって計３回授業研究を実施した。前期教員，後期教員それぞれの視点から意見を出し合い，単元計画を修正した。

【資質・能力の評価】

○ルーブリックの作成

理論研修を踏まえて，今年度新たにルーブリックを作成した。Ｓ（期待以上）・Ａ（十分満足できる）・Ｂ（概ね満足できる）・Ｃ（努力を要する）の４段階評価とし，単元の流れに沿って，具体的な児童生徒の姿を記述した。

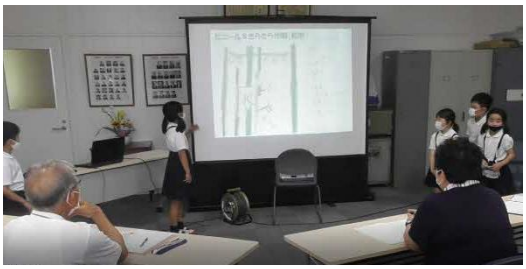
３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

○生活科「大きく育て わたしの野さい」（2年生）

図１で示した「YOSHINA未来学（生活科・総合的な学習の時間）の授業づくりのポイント」に沿って，単元開発を行った。単元の流れを以下に示す。

①自分の育てたい野菜を決める。
②図書資料で調べたり農家にインタビューしたりして野菜づくりに関する情報を集める。
③調査したことをいかして野菜づくりを進める。（継続的に観察したり収穫したりする）
④野菜がカラスの被害を受けているという事実を知り，カラス対策について考える。
⑤カラス対策に必要な予算を得るために，学校運営協議会でプレゼンテーションを行う。



⑥カラス対策を実行する。
⑦お世話になった学校運営協議会の方を招待し，野菜をプレゼントする。
⑧活動を振り返る。

※別紙資料（学習指導案）を参照。

【個に応じた指導の充実】

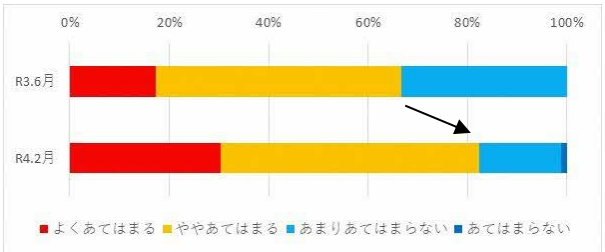
○「９年間を通して育てたい力の系統表」に沿って形成的評価を行い，各資質・能力に達していない児童生徒に関しては，適宜個別に支援を行うようにした。

４　研究の成果と課題等

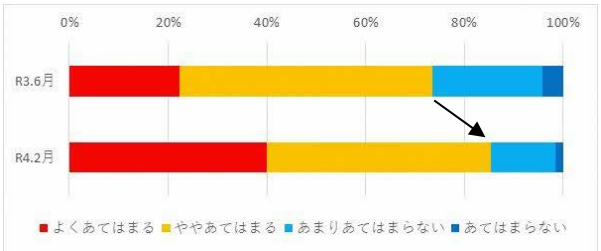
（１）成果

○上半期と下半期の児童生徒アンケート結果を比較したところ，プレゼンテーションにかかわる項目で肯定的評価が¥66%から82%に，主体性にかかわる項目では67%から82%に向上した。

【資料の見せ方や話し方を工夫して，プレゼンテーションできる】



【失敗を恐れずに，いろいろなことに進んで挑戦できる】



○授業研究や日々の実践を踏まえつつ，各学年の単元計画をより探究的な学習が進むように修正することができた。
○理論研修を踏まえて，それぞれの単元計画におけるルーブリックを作成することができた。

（２）課題

○児童生徒アンケートでは肯定的評価が増えた項目でも，教師の見取りによればそれほど数値が変容していないものがある。（「相手の反応を見ながら分かりやすく説明する」等）児童生徒のとらえと教師の見取りとの間に差が生じている。
○与えられた課題を無難にこなすだけの学習活動が見られるなど，児童生徒が失敗したり再挑戦したりするような展開になっていない学年がある。
○ルーブリックを作成したものの，そのルーブリックが妥当なのか，本校の児童生徒にとって有効かどうか，未知数である。作成したルーブリックを基に，実際に評価を行う中で，その有用性を高めていく必要がある。

（３）今後の改善方策等

○各学年の単元計画を再度見直し，与えられたレールの上を児童生徒が進むだけの活動になっていないかを再度検討する。
○来年度以降、作成したルーブリックを基に，実際に児童生徒の評価を行う。その際，児童生徒自身の評価と教師の評価との間に差が生まれているという実態を考慮し，教師―児童生徒間でルーブリックを共有するということも考えられる。
○今年度は３つの学年のみの授業研究であったが，来年度は全学年で実施する方向で計画する。（ただしすべてを全体研修にするのではなく，グループ別研修を取り入れる。）実際の授業の様子を一人でも多くの目で観察し，協議・検証を踏まえた上で，単元計画やルーブリック等をよりよいものにしていく。